20240211　朝礼拝　ローマの信徒への手紙 12 章 9～21 節

「平和であるからこそ」

先日、祖父の葬儀のために地元岡山に帰りました。天台宗のお寺さんによる仏式葬を営んで頂き、そこに私は喪主という形で携わることを赦され、と言うか、強いられ・・・。色々と思うところもありましたが、とりあえず、祖父が望んだ形、望んだ戒名が叶えられたことは、一安心すべきであると受け止めることにしています。お寺さんの説明に従うなら、亡くなった祖父・有岡匠は、亡くなったことでこの地上でのあらゆるご縁が切れて、名前も無くなってしまうんだそうです。だから、これから祖父に呼びかける時は、死後の呼び名である戒名を使わないといけないらしいとのことでありまして・・・。だから、次、四十九日と呼ばれる法要で帰省する時には、私も戒名で祖父を呼んでみようかと思います。そして、実家の者が「え、何のこと？」みたいな顔をしたなら、「30 万も払って付けてもらったじいちゃんの戒名を忘れたのか」と言ってやろうかと思います。まぁ、半分冗談ですが・・・。でも、なんか、腑に落ちないですね。そういうお寺さんの考え方や信仰を否定はしませんが、個人的には、やっぱり腑には落ちないですよね。ただ、とりあえずは、喧嘩だけはしないように、気を付けたいと思います。

聖書の御言葉は、それが語られた時代の状況によって、醸し出す印象がずいぶんと変わってきます。出エジプトの後、約束の地であるシオンに、イスラエルの民が入り込んでいくあたりで語られる御言葉は、完全に異民族・異宗教の根絶を肯定・推奨する激しさを持っています。また、イスラエルの民が神様の御心に反することを行ってしまった場合にも、容赦ない罰が下されたことが記録されています。新約聖書においても、比較的新しい時代、つまり、ローマ帝国によるキリスト教への迫害が激しくなった頃の御言葉は、やっぱり厳しい、激しい雰囲気を持っています。ヨハネによ

る福音書や、ヨハネの黙示録においては、キリスト教以外の存在に対して、非常に攻撃的に振る舞う記述・描写が見られます。キリスト教を信じていない者は、全員滅びるのだ、というような。ただ、その振る舞いの激しさとは、キリスト教自身が追い詰められ、命の危険を感じて、なんと言いますか、「窮鼠猫を噛む」と言うような、反撃・抵抗しなければ、自分たちが滅んでしまうという極限の状況において示されたものでした。大きな敵と戦っている時、大きな敵から迫害されている時、聖書の御言葉は、その時代を生きた信仰者たちを励まし、鼓舞し、明日への希望を失わせないために、あえて厳しく攻撃的な鋭さを持つこともあるのだと思います。

そういう聖書の御言葉の方向性を考えながら、今日の御言葉を見てみますと、おそらく、この御言葉が語れた時代は平和だったんだろうな、という推測ができます。14 節にある「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」という勧めであったり、18 節にある「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」という勧告であったりは、パウロという人が、ローマの教会に手紙を書き送った時代は、それほど荒れてはいなかったことを示しています。このような平和の約束が、有り難く聞かれ、説得力を持っていた時代、ということですね。「わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう」という風に、非信仰者たちの破滅を語るヨハネによる福音書とは異なる時代背景があったのです。

だから、このローマの信徒への手紙が書かれた時代と言うのは、今の現代日本と似ていたのかも知れません。異なる宗教や文化など、教会の営みにマイナスに働く色々な要因はありつつも、そんなに騒めき立って警戒し、攻撃的になる程でもない、そんな社会状況です。異質な存在を滅ぼすのではなく共存し、平和を願い求めることが出来る時代。そういう余裕がある時代。それが、当時のパウロさんが生きた時代であり、今の私たちが生きる時代だと言えます。・・・そんな時代を神様

が備えた下さったことと、そんな時代に私たちが生かされていることを、本当に感謝したいと思います。

ただ、ごく正確に言いますと、そんな時代の、ここ日本に生かされていることを感謝したい、ということですね。同じ時代であっても、場所が違えば、戦争が起こり、憎しみがぶつかり合っています。おそらく、今のウクライナやパレスチナでは、今日のこの「キリスト教的生活の規範」は適用されないでしょう。命の危険が差し迫る中で、「誰に対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がける」ことは、不可能です。そうすることによって、自分や自分の大切な人が死ぬかも知れないのに、「敵を愛せよ」とはなりません。敵側の喜びを自分の喜びとすることも、敵側の涙に合わせて、自らも涙を流すことはできません。目の前の危険を排除するために、「神の怒りに任す」ことも難しいでしょう。だから、やっぱり、この「キリスト教的生活の規範」は、平時における規範であり、平和であることが前提になっていると思います。「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」。そんな綺麗事が心に響くような人が生きる社会は、そもそも平和な社会なのです。

では、平和な社会でしか通用しない「キリスト教的生活の規範」は、争いが続く世界にあって、無力であり無用なのでしょうか。自分の大切な人や物や国のために血を流し合う悲劇に対して、何もすることはできないのでしょうか。・・・私は、そうは思いません。幸いにして平和な社会を、平和な生活を続けている者だからこそ担うことができる役割があります。何故なら、恐れや憎しみを抱いている当事者だけでは、絶対に平和を創り出すことはできないのです。平和を実現するためには、平和の喜びを知っていて、恐れや憎しみに染められていない私たちのような存在が、「平和の使者」としての役割を負う必要があります。戦争が無くならない現実を知って、憎しみが憎しみを産むようなどうしようもない理由があることを弁えた上で、でも、「悪に負けることなく、善を

もって悪に勝ちなさい」と、臆せず綺麗事を言えるような存在は、とても貴重だし、無くてはならないのです。私たちの役割は、この争いの絶えない世界の中で、「まぁ、そういうもんだよ」と言って理解を示すことではなくて、「いや、世界はこうあるべきだ」と言って理想を忘れないことです。「世界」なんて言うとスケールが大き過ぎて、実感が薄いですが、身近なところについても同じです。人間関係において、勤め先において、学校において、「まぁ、社会なんて、そういうもんだよ」と言って賢く理解することに徹するのではなくて、「平和に生きるとは、こういうことだ」と聖書から教えられている一人として、「本当は、こうあるべきなんだよ」といって、社会に働き掛けることをやめないこと。それもまた、「キリスト教的生活の規範」を、このようにして読んでいる私たちの大切な役割であると思うのです。

平和な時代に紡がれた平和な御言葉が、争いの絶えない世界にあって、より輝きを増すように、平和の中に生きる私たちの平和な言葉掛けが、荒みと冷たさを感じさせる社会にあって、より価値を増して行くのです。ちょっと言い方は悪いですが、私たちは馬鹿みたいに甘々な御言葉を宣べ伝えて行こうじゃないですか。祈りは必ず叶うと、泣く人と共に泣きなさいと、惜しまず施しなさいと、敵を愛せよと、善をもって悪に勝ちなさいと。そんなキラキラした理想論を、でも、主の御名によって信じ抜いて・・・、信じることが薄れたこの社会に関わっていきたいと思います。今日から始まる新しい１週間も、「キリスト教的生活の規範」を守らんとする私たち一人ひとりの上に、主のお支えと導きがありますように。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちの上に、尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。また、私たちの住むところを平和に保ってくださり、感謝致します。私たちは、この平和の有り難さと嬉しさを十分に知る者として、あなたの御業の僅かばかりの一端を担って参りたいと思います。聖書の御言葉が指し示す、平和な生き方、理想、願いをしっかりと受け止めて、私たちが遣わされる、それぞれの場所にあって、キリストの良き香り、穏やかな優しさを醸し出すことができますように。私たちが、遠くの平和も、近くの平和も、決して諦めることなく、祈りつつ、励むことができますように。どうか導いてください。すべての人が、すべての人と平和に暮らす、そんな世界が一日も早く実現しますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。